

多様性を発揮する大阪産業（歴史的観点から）

大阪産業経済リサーチセンター 総括研究員 北出 芳久

はじめに

古くは難波京が置かれた政治都市、中世においては石山本願寺を中心とした宗教都市、そして豊臣政権期は政治都市といったように、大阪は都市の性格を大きく変化させてきました。そして江戸期の大阪は、「天下の台所」の名の通り、商業都市・工業都市として開花しました。当時、日本全国から様々な物資が大阪に集荷され、優れた加工技術をもって生産された酒・油・木綿などの商品は、「くだり物」と呼ばれ、ブランド品として江戸などに売りさばられました。

以来、大阪の産業は実に多様な商工業の拠点として栄え、1930年代末期（昭和10年代前半）頃までは工業生産額で日本一の地位にありました。

本調査では、産業の多様性が大阪の特質であることを、歴史的経緯、地場産業の実態調査、及び統計分析によって検証し、特質に即した地域活性化施策の方向性について検討しました。これから3回に分けて結果をご紹介します。本稿では、歴史的視点から、いかにして大阪の産業が多様な発展を遂げたかについて取り上げます。

1. 調査結果のポイント

- 大阪の産業に多様性をもたらした江戸期は、各種商業、金融業、手工業が発達、西回り等の航路や河川・掘割を活用し、舟運を中心とした物流機能も発達した。
- 維新时期に2つの官営工場と日本初の近代紡績工場が立地したことにより、機械、金属、化学、繊維産業が生み出された。
- これらの製造業には、卸売業の存在が欠かせない。大阪に製造業と卸売業の双方が集積していたことによって、相互に依存しながら発展を遂げてきた。
- 大阪は、他府県出身の多くの企業家が集い、活躍する舞台となった。
- 陸・海・空の交通・物流インフラと物流関連産業の発展が、大阪産業の多様性を支える。

2. 江戸期の大阪産業

天下の台所として日本の中央市場的地位にあった大阪では、米をはじめとした大量の農産品・工業原料が移入されました。その一方、近郊を含めて卓越した加工業の発達により、多様かつ高品質な農産加工品や手工業製品が産出され、その多くは江戸を中心とした消費地に送られました。その中でも特に酒、醤油、油、木綿、銅、古着などは額が大きく、重要な物産でした（図表1）。一般に江戸期の大阪は商業都市のイメージが強いのですが、一大工業都市でもありました。

図表1 正徳4(1714)年 主な大阪移出品一覧

品目	銀高(匁)	品目	銀高(匁)
酒	1,200,089	鬢付油	135,828
酢	99,314	戸	317,759
醤油	3,898,676	障子	103,191
素麺	211,037	万塗物道具	2,839,676
菓子	307,900	万木地指物	496,165
油	34,639,531	地黄煎	171,690
油粕	3,267,381	革羽織	312,357
蠟燭	309,397	革足袋	506,646
木わた	502,723	鍋釜	1,501,663
白木綿	6,264,537	万鉄道具	3,750,256
綿木綿	7,066,165	長崎下り銅	6,587,995
古手(古着)	6,044,723	焼物	1,574,219
繰綿	4,299,443	万荒物	568,941
扇子	209,627	長崎下万商売物	395,644
傘	650,410	刀、脇差	183,417
雪駄	1,174,245	書物	97,902
櫓	478,641	墨	51,371
小間物	2,838,344	人形	196,580

出所：脇田修(1963),pp320-321第83表より作成した。ただし油については新修大阪市史編纂委員会(1989),p 813の表126から補足。

3. 明治～戦前大阪産業の再生・発展

明治維新时期には、蔵屋敷の廃止や銀貨制度の廃止等で、大阪経済は大打撃を受けましたが、五代友厚らの活躍によって、新産業の起業、商工会議所の設立等により、近代大阪経済の土台ができました。

この間、大阪造幣寮（現・造幣局）と大阪砲兵工廠という2つの官営工場が設置されたことにより、造幣寮が大阪における化学工業の、砲兵工廠が鋳造や金属加工技術の発達をもたらしました。それと並んで、日本初の近代紡績工場の設立を契機に、綿紡績・織物業が集積し、大阪は「東洋のマンチェスター」と呼ばれるに至りました。

続いて第1次大戦（1914-18）頃には重化学工業の発達もみられ、大阪が統制経済の影響を受け始める1930年代半ば頃までは、東京を凌いで大阪が日本一の工業生産額を誇りました（図表2）。

図表2 職工5人以上工場の生産額
（単位：千円、カッコ内は対全国比%）

年	大阪		東京		全国	
1909	139,208	(17.5)	97,566	(12.3)	796,428	(100.0)
1914	251,680	(18.3)	192,938	(14.1)	1,372,428	(100.0)
1919	1,158,235	(16.8)	801,263	(11.6)	6,889,409	(100.0)
1929	1,345,559	(17.4)	1,018,387	(13.2)	7,716,774	(100.0)
1937	2,758,134	(16.9)	2,418,867	(14.8)	16,356,176	(100.0)
1941	4,281,538	(14.0)	5,554,151	(18.2)	30,537,486	(100.0)

出所：阿部（2006）, p69を参考に、通商産業大臣官房調査統計部編（1961）より作成。

4. 戦後の大阪産業の復興

戦後、焦土と化した大阪でしたが、朝鮮戦争特需を契機として軽工業を中心にいち早く復興を果たしました。特に自由貿易が再開した1950年以降は、関西系の大手繊維系商社、鉄鋼系商社が合併再編を繰り返しつつ、総合商社化し、多くの専門商社とともに貿易振興の担い手となりました。商業と工業が併存することで相互に大きな成長を遂げるという構図は、江戸期に共通しています。

5. 大阪で活躍した企業家

大阪の近代産業基盤づくりを果たした、五代友厚、松本重太郎、藤田伝三郎や、総合商社の先駆となる伊藤忠兵衛、近代証券業を確立した野村徳七、生命保険制度の基礎を作った弘世助三郎のほか、建築、製薬、家電、百貨店、食品、スポーツ用品、新聞、レジャー等、多方面で明治以降に大阪で活躍した企業家の多くは、大阪以外の出身者で占められており、大阪が創業・発展の地としていかに魅力的な土地であったかがうかがえます。

6. 交通・物流インフラと物流関連産業

多様な産業が立地する重要な条件として、物

資の集散・保管、人的移動の利便を支える交通基盤や物流機能があげられます。大阪は、瀬戸内海の東端に位置することから、近世では全国をつなぐ航路のターミナルとして大量かつ広域の物流を可能にしました。また、京阪間は淀川、大阪市中は縦横に巡らせた堀や運河により、舟運が発達したことで、商工業を支えて来ました。

そして今日に至っては、国土軸に近く、アジア各国とも距離的に近い位置にあるなど、陸・海・空にわたる交通・物流の要所として機能してきました。また、e-コマースの進展に伴い、大阪周辺は主として西日本の配送網のハブとして重要な位置にあり、臨海部や内陸部の高速道路沿いを中心に大型物流施設が相次いで建設されています。

7. おわりに

大阪の産業振興にあたっては、地域産業の特質を理解し、その強みを引き出すようにしていかなければなりません。そのために、地域産業の成り立ちを経済史の視点から追うことには大きな意味があります。

今回は、大阪の地場産業の代表格であり、多様な加工技術を持った企業が多数集積し、関係する卸・小売業者も多い繊維産業への調査結果から、大阪産業の特質に迫ります。

参考文献：

脇田修（1963）

『近世封建社会の経済構造』御茶の水書房

新修大阪市史編纂委員会編（1989）

『新修大阪市史第3巻』大阪市

阿部武司（2006）

『近代大阪経済史』大阪大学出版会

報告書（資料No.171）は、当センターが実施した他の調査結果とともに当センターのウェブサイト（<http://www.pref.osaka.lg.jp/aid/sangyou/>）にてご覧いただけます。